

テルグ語動詞の時制・法・アスペクト

Tense-Mood-Aspect Marking on Telugu Verbs

児玉望

Kodama Nozomi

1、形式にみられる体系の偏り

テルグ語の動詞形態は、主文述語位置とごく一部の補文標識（引用動詞 *anu-* "言う" の活用形および疑問小辞 *ō* などの小辞）の前にのみ現れうる「定形」と、それ以外の従属節にあらわれる「不定形」に大きく二分されている。従属節および助動詞構文あるいは複合動詞構文の前分にのみ現れる「不定形」のうち時制区分のあるものは以下の二つである。いずれも、相対時制、つまり時間的前後関係の区分の基準時の存在は含意されるがこの基準時が必ずしも発話時と一致しない時制である。

・関係（連体）分詞

完了関係分詞	相対過去肯定
未完了関係分詞	相対非過去肯定
否定関係分詞	否定（時制なし）

・連用分詞

完了分詞	相対過去完結相肯定
未完了分詞	相対現在進行相肯定
否定分詞（2種）	否定（時制なし）

これに対して、「定形」動詞は、否定形と肯定形、命令法・直説法・仮想法のように分類できるが、時制による文法カテゴリー区分はこのうちの肯定形直説法にのみみられ、主文では発話時を基準時とした絶対時制区分を表示する。

本稿では、このような時制表示体系の著しい偏りについて、必要に応じて日本語や他の外国語と対照しつつ、時制の機能の観点からの説明を試みる。

2、肯定形定形動詞

日本語では、事象内部での状態の時間的変化を含意しない述語が形容詞・形容動詞文で表わされ、動詞は基本形で状態のみを表わすものが「いる（居る）」「ある」「要る」「違う」などごく少数に限られている。「できる」ほかの可能動詞や「わかる」など、状態を表わしうる動詞でも（「成就」の意味を含め）状態変化の用法をもつものが多い。テルグ語でも同

様であり、基本的に動詞は事態の変化を表わしている。たとえば、英語には *sit, stand, lie* などの存在の様態を示す一群の状態動詞があるが、テルグ語の *kūrucun-* "すわる" は、日本語の「すわる」と同様に状態変化動詞であり、単純な時制形が個別の事象を指示する場合には、発話時以前での変化の完了（過去時制）か発話時以降の変化の開始（未来時制）かの二項対立となり、非過去形の真理値が発話時において決定できるのは習慣のような不特定の（総称的なあるいは数量化された）事象を表わす場合に限られる。

(1) a. *rāmuḍu kūrcun-n-āḍu*

「ラームはすわった」(過去-3 人称単数男性)

b. *rāmuḍu kūrcuṃ-ṭ-āḍu*

「ラームはすわる」(非過去-3 人称単数男性)

時制は、これらの事象の完了または開始の時点がいつであるかを、発話時との前後関係によって二つのカテゴリーに分類する。それ以上の時点の特定は任意であり、必要があれば *eppuḍu* 「いつ」などの時点情報を求める疑問副詞でより特定化された時点をたずねればよいし、また、*eppuḍu aynā* 「いつか、いつであれ」のような時点を特定しない副詞を用いて事象の有無を問う場合のように、事象を個別化するのでなく数量化していることを明示する場合にも用いることができる。

(2) a. *eppuḍu rāmuḍu vacc-i-āḍu*

「ラームはいつ来た？」(過去-3 人称単数男性)

b. *rāmuḍu eppuḍ(u) aynā vacc-i-āḍ(u)=ā*

「ラームは来たことがある？」(過去-3 人称単数男性=疑問小辞)

ある特定の時点（基準時）においては動詞のあらかず事象との関連でどの状態に区別されるか、つまり「すわっている」かどうかを表わす場合には、相対時制をあらかず不定形動詞と存在動詞で構成される複合動詞構文を用いなければならない。

(3) a. *rāmuḍu kūrcuṃ-ṭ(ū) un-n-āḍu*

「ラームはすわろうとしている／いた」(未完了分詞+「いる」-過去-3 人称単数男性)

b. *rāmuḍu kūrcun-i un-n-āḍu*

「ラームはすわっている／いた」(完了分詞+「いる」-過去-3 人称単数男性)

この場合、存在動詞は形態論上は過去の接辞をとるが、発話時に観察される状態を指示することもでき、時制の区別がない。動作の完結点の存在が含意されない「走る」のような動詞（句）では、完了分詞による状態構文を欠き、未完了分詞の状態構文が将然相ではなく進行相になる、という違いはあるが、大多数の動詞では、動詞の基本形が完結相

(perfective)の絶対過去／絶対未来による時制対立、未完了分詞と存在動詞の構成する補助動詞構文が時制の区別のない未完結相(imperfective)、という時制・アスペクト体系になる。完了分詞による状態構文は、基準時を絶対時制の枠組みで区別しない、完結相の相対過去時制構文(perfect 過去完了・現在完了・未来完了に相当)ということになる。

しかし、テルグ語でも存在動詞のほか、少数の状態動詞があり、これらが形態論上、特殊なグループを形成する。単独である時点での状態をあらゆる時制の区別のない動詞形(不定時制形)をもつ動詞群である。

(4) a. rāmuḍi-ki ā viṣayaṃ telus-u

「ラームはそのことを知っている」(「(与格)知る」不定-3人称)

cf. rāmuḍi-ki ā viṣayaṃ telis-in-di

「ラームはそのことを知った」(「(与格)知る」-過去-3人称)

b. rāmuḍu kamala-ni erug-u(nu)

「ラームはカマラを知っている」(「(主格)知る」不定-3人称)

c. adi cāl-u

「それでじゅうぶんだ」(「たりる」不定-3人称)

動詞 *telus-*「知る・わかる」は、状態変化動詞としての用法も持ち、通常の過去・非過去の時制形ももつが、これらを欠くものが大半である。*cāl-*「たりる」のように、3人称主語形のみで活用形の乏しいものもある。また、動詞 *rā-/vacc-/vas-*「来る」は、3人称不定時制形 *vacc-u* では移動ではなく「できる」という意味になり、また、助動詞としても「可能(法(modality)的な可能)」の用法をもつ。不定時制形は、歴史的にはすべての動詞がもっていた非過去の形であるが、現在は一部の方言の仮想法の用法に残存するほかは、これらの状態動詞や助動詞に特有の活用形となっている。

ただし、状態動詞がすべて不定時制形を肯定直説法定動詞形として用いるわけではない。指定動詞 *kā-/ay-/av-*「である／になる」の不定時制形は、3人称形 *av-unu* が肯定の間投詞として「そうだ」の意味で使われるだけであり、状態の意味の一種ともみられる繫辞「である」としての用法での定動詞肯定形は音形ゼロで、動詞のない名詞文を構成する。同じ動詞の肯定時制形は、状態変化、つまり「～になる」の意味の用法となる。活用形によっては、語幹 *kā-* が状態、*av-* が状態変化の意味に区別されて用いられるものもある。

存在と所有関係という広い用法を持つ代表的な状態動詞であり、未完了アスペクト構文で助動詞的な用法ももつ存在動詞 *uṃḍ-/un-/uṃ-*「ある、いる」の時制形態は、この点で興味深い。この動詞は、他の事態の変化を表わす動詞と共通の時制形の区別をもつが、し

かし、過去時制接辞を伴う語形が時制の区別のない直説法肯定形として用いられ、非過去時制接辞を伴う形は仮想法の意味をもつ。つまり、存在や所有を話し手（疑問文では聞き手、伝聞文ではある特定の誰か）によって確認された事実として述べる場合には過去形、そうではなく、たとえば推量されたものとして述べる場合には非過去形が用いられるのである。

(5) a. *rāmuḍu akkaḍa un-n-āḍu*

「ラームはあそこにいる／いた」（過去-3 人称単数男性）

b. *rāmuḍu akkaḍa uṃ-ṭ-āḍu*

「ラームはあそこにいるだろう／いただろう」（非過去-3 人称単数男性）

このような時制形の法への転用は、日本語での「あった！」や「いた！」のような発話での過去タの用法と比べると興味深い。この用法でのタは、なにかの存在そのものが過去において成り立つ、という意味での時制を表わしているわけではない。現在において存在しているという事実を話し手がある時点において確認した、ということだけを述べているだけである。その意味では、日本語の「あった／（絶対）ある」の対立も法に転用されていると見ることができる。

このような事実は、状態表現一般において時制の区別が実は冗長なものであることを示しているようである。事態の変化を含意しない状態に関する言明というのは、ある特定の時点を含む一定の時間にわたって観察している観察者がいる、ということを含意している。その「一定の時間」を特定する必要があるれば直接的に表現すればいいことであり、中間的に、発話時との前後関係で過去と現在のカテゴリーに二分する必要はない。状態表現にも時制の区別をもつ日本語のような言語では、この冗長性を「さっきまでいた（が今はない）」のように、過去において成り立ち今は成り立たないというような、状態の変化を含意する過去形の用法に用いるが、動詞本来はそのような変化を含意しているわけではないし、状態の変化の内容を特定したければそのための動詞を用いれば表現できることである。「存在」のように客観的に観察しうる事態の表現ではむしろ、話し手本人をその事態の観察者として特定するかどうかの区別のほうが重要であるということは理解できる。

逆に言うと事態の変化について言及する場合には、発話の時点においてその変化がすでに生じたものなのか、発話時点より先に生じるものなのかの区分がそれだけ重要である、ともいえるだろう。（昔話や予言を含む）「語り」のように、発話時との時間的關係が同じであるような一連の事象についての言語的表現が続く場合には時制の区分は意味をもたなくなるが、そのような特殊な事例を除けば、少なくとも文字化以前の（本来の）言語使用

においては、発話時を基準とした時間の枠組みのどちらに位置づけるかは、個別の事象について言語化する場合の必須の情報であろうと考えられる。では、事象の変化の観察についてはどうだろうか。眼前で観察される日没について「日が沈む」というか「日が沈んだ」というか、というような場合には、観察者の存在の前提には過去であれ非過去であれ差はない^註が、出来事が昨日のことか明日のことか、ということになると、過去と非過去の非対称が明らかである。語られる過去の事象はおそらく観察者の存在を含意するが、未来については確実にその含意がない。実のところ、過去時制とは、単に事象を過去に位置づけるだけでなく、その事象の発生を話し手が確認した、ということまでを含意するカテゴリーである可能性がある。たとえば、次のような総称的表現を比べてみる。

(6) a. *rāmuḍu eppuḍ(u) aynā vacc-i-āḍ(u) = ā*

「ラームは来たことがある？」(過去-3 人称単数男性=疑問小辞)

b. *rāmuḍu eppuḍ(u) aynā vas-t-āḍ(u) = ā*

「ラームは来ることがある？」(非過去-3 人称単数男性=疑問小辞)

過去形の疑問文に肯定で答えても嘘をついたことにならないのは、「ラームが来る」という事象の発生を話し手が発話時以前の過去において確認した場合に限る。非過去の疑問文に対しては、この場合はもちろん、明日来ると聞いただけの場合でも肯定で答えて問題がない。つまり、過去形のほうが非過去よりも文の真偽の確定に関わる情報の限定の度合いが高いのである。テルグ語のように、時制の対立が状態変化動詞に限られているような言語では、この「時制」が実は「法」であって、話し手が事態を確認したかどうかを示している、と解釈することも可能なのである。存在動詞の直説法形の形態も、そのように考えれば状態変化動詞と変わらない、ということになる。

3、否定形定形構文

テルグ語の動詞は、肯定と否定の対立(いわゆる極性 *polarity*)をその形態に取り込んで、語を構成する接辞として表示するが、否定の接辞は時制の接辞とは共起しない。つまり、否定形はどの活用形においても時制の区別をもたない。これを、「形態論上の極性の非対称」と呼ぶことにする。このことは、時制が「生起した/する事象の、発話時または基準時との時間的關係に応じたカテゴリー分け」であることを考え合わせると、事象が生起しなければ時制もありえない、というように、ごくもつともにも思われる。しかし、否定されるのは単に事象の生起だけではないのであり、否定文は肯定文の意味するところに対応して、生起する事象の範囲として時制が限定する時間における事象の生起を否定する

のだとすれば、言い換えれば、否定のスコープが時制のスコープの中に含まれるような論理的意味に対応する否定文であれば、否定文に時制があってもおかしくはない。実際、多くの言語で否定形にも時制があるし、否定時制を単一の語形では表わせないテルグ語にも、否定文を構成するいくつかの構文がある。しかし、ここでテルグ語はさらに、「構文論上の極性の非対称」とでもいうべき変わった特徴を持つ。たとえば日本語であれば、「来た」に対して「来なかった」、「来ている」に対して「来ていない」というように、否定文は対応する肯定文をもつのであるが、テルグ語の場合、この対応関係がほとんど見られないのである。たとえば、1で挙げた存在動詞を用いる進行形や相対過去形などの補助動詞構文は、存在動詞に対応する否定形に変えた形の構文をもたない。ただし、構文論上は極性が対称にみえる日本語でも、「来た？」の答えとしては「来なかった」が適切な場合もあれば、「来ていない」が適切な場合もある。「来ていた？」に対して「来なかった」と答えても問題はない。「意味上の極性の非対称」はおそらくどのような言語にでも存在する。前節でも少し述べたように、肯定文自体が複合的な意味内容をもっており、否定されるべき部分がひとつとは限らないからであろう。テルグ語ではこのような意味上の非対称が、それをあらわす形の上にも反映している、というようにも見るができる。

テルグ語で肯定形動詞の位置に現れる否定形は、否定形動詞単独、存在動詞の否定形の一つである *lēdu* を用いるもの、指定動詞の否定形の一つである *kādu* をもちいるものの3種類に分かれる。このうち、主として部分否定に用いられる *kādu* を除き、時制や相の対立に関わると考えられる3つの形について述べていく。不定詞、動名詞、*lēdu* のいずれもが時制の区別を欠く形式であり、これらの構文が時制的意味をもつのは構文固有の機能である。

例)「来る」 否定活用動詞 *rā*-人称接辞

不定詞否定構文 *rā lēdu*

動名詞否定構文 *rāv-aṭaṃ lēdu*

このうち、すべての動詞が最低一つは持っているのが否定活用動詞形である。状態動詞や助動詞の否定は、この否定活用形の否定文のみを用いる。指定動詞 *kā*-/ay-/av- 「である／になる」は、状態否定の *kā*-、状態変化否定の *ava*-の二つの否定活用をもち、存在動詞も、時間限定のない存在否定 *lē*-とならび、移動の可能性を含意する一時的存在の否定に用いる *uṃḍ*-をもつ。事象の不生起は、事態の変化を起こさない点で状態構文と似ていると考えられるが、この否定活用形も状態動詞と同様に時制の区別に関与せず、過去の状態にも用いられうる。

(7) a. rāmuḍu rā-ḍu

「ラームは来ない／来ないだろう」 「来る」-否定-3 人称男性単数

b. nā-ku telugu rā-du

「私はテルグ語ができない／できなかった」 「来る」-否定-3 人称中性単数

しかし、過去の特定の時点において完結するような個別の事象の生起あるいは完結の否定には、否定活用ではなく不定詞否定構文が用いられる。生起することが期待されていることがそもそも起きなかった場合のほか、あるいは、しばしば副詞 *iṃkā*「まだ」を伴って、発話の時点あるいは過去の基準時においてまだ完結していないという場合も含まれる。evar(u)-ū 「誰も」のような疑問詞に小辞を伴う構文をとる場合のような全称否定は、生起することが期待されている複数の事象がすべて生起しなかった場合だと考えることができる。

(8) a. rāmuḍu rā lēdu

「ラームは来なかった」

b. rāmuḍu iṃkā rā lēdu

「ラームはまだ来ていない」

c. evar(u)-ū rā lēdu

「誰も来なかった／誰も来ていない／誰も来ていなかった」

否定活用形否定文との違いは、事象が生起しなかったことの観察者の存在を含意し、かつこれを話し手に特定している、という点にもある。そして、これは動名詞否定構文にも共通する特徴である。動名詞否定構文の場合には、観察者がある特定の時点で確認した事象の不生起が、ある一定の時間内と限定されていることが含意される。この時点は発話時であっても発話時以前の任意の時点であっても区別されない。不生起が確認された事象は数量化されていると考えられ、習慣的反复の停止の場合にも用いられる。また、否定されているのは動作の生起であって、生起した動作が完結するものかどうかを問わないし、動作の完結点の存在が含意されない動詞（句）でもこの構文に現れうる。

(9) a. rāmuḍu rāv-aṭaṃ lēdu

「ラームは（このごろ）来ない」「ラームが来たということはない」

b. rāmuḍu ikkaḍa uṃḍ-aṭaṃ lēdu

「ラームはここに（住んで）いない／いなかった」 「いる」-動名詞 「いる」否定

cf. rāmuḍu ikkaḍa uṃ-ṭ(ū) un-n-āḍu

「ラームはここに（住んで）いる／いた」（未完了分詞＋「いる」-過去-3 人称単数男性）

